

ペンギンの会 ニュース

No.34 2017.05

いつもペンギンの会を支えてくださって
いる皆さま、いかがお過ごしですか？やっ
と暖かい陽がさすようになり、心地よい季節
になってきました。そして、三宅さんが亡く
なられて半年が過ぎました。ペンギンは何
とか日々の行事をこなしています。今年もま
た、桜を愛でることができそうです…。

私ごとですが、昨年は脳圧を測るため
に1円玉強の大きな穴を頭蓋骨に開け
るオペを4月7日に行っていたので、花見
には参加できませんでした。でも結局、脳
外科では予定していた手術ができなくな
ってしまい、頭痛を取ることも無理だと言わ
れてしまいました。目の方は、2年前に右眼
が見えなくなり、左眼も昨年の今よりだい
ぶ視神経が委縮してきているようで、色が
白っぽくしか見えないので、もどかしく思っ
てしまいます。あと何年、桜を愛でること
ができるのか…。でも、先のことは考えず、
今をせいっぱい生きようと思います。なの
で、今年の花見は、とても楽しみです。しっ
かり心に焼き付けてきます。

先の3月12日に、東日本大震災・福島
原発事故および熊本地震の被災障害者
支援街頭カンパを行いました。毎年3月
は冷え込みますが、やはり風は冷たく、ビラ
を持つ手も震えました。今年もJCL
の「障害」当事者の皆さん、介護者、関わ
ってくださっている皆さん、35人くらいの

ひとたちと3時間、いつものように声をはりあ
げアピールして、ビラをまくことが出来まし
た。参加して下さった皆さん、本当にあ
りがとうございました。震災から6年たち
ましたが、被災地の現状はまだまだ厳しい
です。復興も遅れていて、未だに仮設住宅
に住まわざるを得ない人達がたくさんおら
れます。とりわけ「障害」を持つ人達は、
大変な思いで、なんとかしのいでおられま
す。世の中はもう「震災は過去のこと」の
ようになって、風化させられてゆく一方です。
私に、私達に、出来ることは限られてい
ます。体が動いてくれる間は街頭に立っ
て、声をあげてゆくこと。ビラをまき、被災地
の現状を伝えて風化さえないために何が
出来るのか考え続けてゆくことが大切な
のだと、そう思います。

ペンギンの会も三宅さんを失い、瀕死の
ようになった気がします。ペンギンの会を
維持させてゆくためにも、他者に関わっても
らい、自立生活を身をけずってでもこなし、
ここ数年で考えてきたことを行動に移し
て取り組んでゆけるようにしたいと思っ
ています。皆さんも色々と困難を抱えておら
れると思いますが、なんとか踏ん張って生き
抜いてください。私達も一歩ずつ、前に歩
んでゆきます。これからもペンギンの会をお
支えください。よろしく願いいたします。
李清美

さがみはらしょうがいしゃさっしょうじけん おも
相模原障害者殺傷事件に思うこと

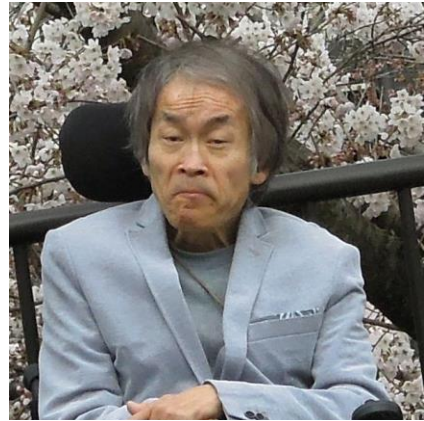
しげしゅうさく
繁周 作

さくねん じけん み とき なに
昨年この事件のニュースを見た時に何を
かんが よ わ
どう考 えたら良いかも分からず、そこはか
いか かな おそ かん
とない怒りと悲しみと恐ろしさを感じるだ
ちよくし しこう ていし
けで、直視しようとすると思考が停止し、
なみだ で じょうたい ほんとし
涙 が出るばかり…そんな 状 態 が半年ほ
つづ
ども続いた。

はなし じけんちよくご ほうどう
さて、話 は事件直後にさかのぼる。報道
おお はんにん とくいせい だっぼう
の多くは犯人の特異性、つまり脱法ドラッ
たいま しょう そ ちにゆういん けいれき
グや大麻を使用し、措置入 院の経歴などを
おお と あ かれ じゅうど
大きく取り上げた。そして彼の「重度
しょうがいしゃ ひと て わずら なん
障 害 者 は、人の手を 煩 わすばかりで何の
せいさんせい で
生産性もない。コミュニケーションすら出
き ひと い か ち
来ない。そんな人に生きていく価値はない」
しゅちょう かれ もうそう つた
という主 張も彼の妄想として伝えられて
きおく たし みみ うたが
いたように記憶している。確かに耳を 疑 う
ことば かれ もうそう
ようなとんでもない言葉だけに「彼の妄想」
しん き も じょう
と信じたい気持ちもあった。が、ネット 上
あくみょうだか ぼうけいじばん ねんいじょう
の悪 名 高き某掲示板では10年以上も
まえ て か こ み
前からこの手の書き込みはよく見かけたし、
たし はんにん とくい
これで確かなことは「犯人だけの特異な
しろう もうそう ふへんてき しろう
思想・妄想」ではなく、「もっと普遍的な思想
だ」ということだ。

うち けんじょうしゃげんそう ゆうせいしろう
[内なる健 常 者 幻想と優 生 思想]

あお しば かい よこつかこういち し のうせい
青い芝の会の横塚晃 一氏は「脳性マヒ
しゃ しん じかく かがみ まえ た ど
者としての真の自覚とは、鏡 の前に立ち止
つら じぶん
まって（それがどんなに辛くても）自分の
すがた つぎ
姿 をはっきりとみつめることであり、次の



しゅんかんふたたび じぶん たちば かえ しゃかい
瞬間 再び自分の立場に帰って、社会の
へんけん さべつ たたか どうし
偏見・差別と 闘 うことではないか」と同士
と わたし ことば なら じけん
に説いた。私 もその言葉に習い、この事件
しんそう かんが まえ じぶん うち けん
の真相を 考 える前に自分の内なる健
じょうしゃげんそう ゆうせいしろう み
常 者 幻想と優 生 思想を見つめてみよう
おも
と 思う。

しょうじき か わたしじしん じけん
正 直 に書くと、私 自身もこの事件の
はんにん ちか かんが で き じぶん
犯人に近い 考 え（「出来ることなら自分も
けんじょうしゃ しゃかいてき
健 常 者 になりたいし、社会的にみても
しょうがいしゃ い こ
障 害 者は居ないに越したことはない」とい
かんが も うち
う 考 え ）を持っていた。これこそが「内
けんじょうしゃげんそう ゆうせいしろう
なる健 常 者 幻想と優 生 思想」だ。

きげん わたし りょうしん とく ははおや
その起源は私 の両 親（特に母親）は
わたし しょうがいじ わ
私 が障 害 児だと分かったときに、その
きほんてき きょういくほうしん で き けん
基本的な教 育 方針として「出来るだけ健
じょうじ あつか き
常 児として 扱 う」と決めたことにあるのか
し くわ けんじょうしゃ あに そんざい
も知れない。加えて健 常 者の兄の存在も
おお おも おや わたし おな
大きかったと思う。親も私 も（「同じよう
い じゅうじゅうし おや
には行かない」と重 々 知りつつも）、親は
ないしん なに くら
内心では何かにつけて比べていたようだった
わたし なに つ あに
たし、私 も何かに付けて兄のやることはす
おな ゆえ
べて同じようにやりたがった。それ故か、

しぜん な ゆ さだ
自然の成り行きかどうかは定かではないが、
わたし なが けんじょうしゃげんそう かたまり
私は長らく「健全者幻想の塊」のよ
うな人間だった。

ぐたいてき かがみ まち
具体的には…まず鏡や街のショウウィ
ンドウに写る自分の姿を醜く感じ嫌い
だったし、言語障害のある自分の声を聞く
いま いや しかた よう のうせい
のは今も嫌で仕方ない。要するに「脳性ま
ひの自分」が大嫌いだった。

せいじん じりつ おも
成人してからは「自立したい」という思い
は強くあったが、「それには就職して
いちにんまえ しゅうにゆう え な おも
一人前の収入を得るしか無い」と思って
いたし、そのせいか「働かざる者食うべか
らず」的な「健全者社会の常識」を「唯一
むに じょうしき おも こ しゅうしよく
無二の常識」と思い込んでいた。就職は
うよきよくせつ やま お つ
紆余曲折が山ほどあって落ち着くまでに1
ねんちか こううん へいせい
0年近くかかったものの、幸運にも平成バ
ブルと情報革命（IT化）の波に乗って
アイティー かんけい いわゆる だいきぎょう さんか きぎょう
IT関係の所謂大企業傘下の企業に
にゅうしゃ わたし けんじょうしゃげんそう
入社したことで私の「健全者幻想」は
ピークに達する。

しかし、その実態は「窓際族」ならぬ
まどそとぞく い まわ
「窓外族」とでも言おうか、とにかく周り
のスピードについて行けず、バブル崩壊で
しごと じたい すく
仕事自体が少なくなったこともありプロジ
ェクトから外され、仕事はほとんどしてなか
ったのである。が、それでも上司からも
どうりょう おもてだ う
同僚からも表立ったイジメを受けること
も、イヤミを言われる事もなく、同等に扱
われているように感じていた。（今思うと単
きゃく あつか は もの さわ
に「お客さん扱い」つまり「腫れ物に触る

あつか
ような扱い」をされていただけなのだが…)

わたし さっかく さっかく かさ
つまり私は錯覚に錯覚を重ねて
しょうがいしゃ じぶん まっさつ
「障害者の自分を抹殺した」のである。

じゅうどうしょうがいしゃしせつ のぞ み [重度障害者施設を覗き見て]

わたし せいき むか ころ
そんな私だったが21世紀を迎える頃、
ふたたび じぶん しょうがいしゃ こと おも し
再び「自分が障害者である」事を思い知
るときが来る。それは職場環境など外的
しょうがい こと おも し
な要因ではなく、脳性まひの二次障害に
けいついしょう きょくど あつか に じ
よる頸椎症の極度の悪化だった。二次
しょうがい こと とき
障害の事はともかくとして、その時に
にゅういん びょういん じゅうどうしょうがい ちい
入院した病院に重度障害児のための小
さな入所施設が併設されていた。入所
しせつ い びょうとう かたすみ ふつう にん
施設と言っても病棟の片隅に普通の6人
べや おな ひろ へや すく
部屋と同じ広さの部屋にベッドが少なくと
も10以上は並んでいたように思う。歩行
くんれん とき へや まえ とお す
訓練の時その部屋の前を通り過ぎてからリ
ハビリの先生が小聲で「食事も、排泄も、
せいしき
清拭もベッドでやるんだよね。そこだけでも
なんとかしてあげたいと思うんだけど…」と
おっしや おぼ
仰っていたのをハッキリ覚えている。
にゅういんちゅう なに ちい もよお
入院中そこで何かの小さな催しがあ
わたしたちにゅういんかんじゃ まね はじ
って私達入院患者も招かれて初めてそ
へや なか はい じゅうどうしんしんしょうがい
の部屋の中に入った。重度心身障害児は
なんど み とく なん おも
何度か見ていたし特に何とも思わなかった
けつ い ね う おも
し、決して「生きてる値打ちはない」とは思
わなかったが、「(自分の子供時代と比べて)
こ ふこう あわ め み
この子たちは不幸だな」と哀れみの目で見
ていた事は確かだ。それは一目で子供達の
たいへん ふじゅう わ
大変さというか不自由さが分かったからだ。

寝たきりで声も一切発せず微動だにしない
子供。逆にベッドの柵に捕まって立ってベ
ッドの柵を揺らしながら「ここから出してく
れ！」と言ってるかのように大声で叫んで
いる子もいた。偏見かも知れないが見た感
じ「活き活きと目を輝かしている子供」は
一人もいなかったようにも思う。他方で介護
職員が忙しそうに動き回られているの
を見て、精一杯頑張られているのは見て取
れたし、「大変だなー」とも思った。が、そ
の動きがどこか機械的で、子供達をモノ扱
いしているように見えたのが印象として
残っている。施設や職員によっても、また
入所者によっても差はあるだろうが、「手
と足を使って介護するだけで手一杯で心
を通わず余裕が無いのかもしれないなー」と
も思う。

自立障害者グループの機関誌でわざわざ
書く必要はないと思うが…やはり、そも
そも「重度障害児・者を多数集めてまとめ
て面倒見る」という発想自体が間違ってい
ると改めて強く思うところだ。

また、これもあちこちで指摘されている事
だが、この事件で45人もの死傷者を出し
た一因は「多数の重度障害者を一つの
施設に押し込めていた」ことにあるのだ。

この事件を教訓として最低でも
「障害者施設の規模の縮小と分散と
地域開放」を実現し、可能な限り地域での

自立生活もしくは少人数の介護付きグル
ープホームへの施策転換を実現するべきで
あろう。

[誰でも陥る(?) 優生思想]

今回の事件で「その背景に優生思想があ
る」とする見方も多い。上で私自身も健
常者幻想と優生思想に染まっていたこと
を書いた。それ故、相模原事件を考
えて過去の(?)自分(健常者幻想の上に、
少なからず優生思想に染まっていた自分)
に気付かされた。

それ自体は非常に恥ずかしい限りだが、
障害者の私でも染まるのだから、健
常者にしてみれば当然のことかもしれな
い…例え障害者の家族、友人、知人など
障害者に好意的な人でも「本人のために
も社会のためにも障害者は生まれない方
が良い」と考える人は多分大多数を占める
のではないかと思う。

実際「出生前診断で染色体異常が見
つかった母親の実に97%が中絶し
ている」という驚くべき実態がある。

この現状は障害当事者としては放置で
きないし、なんとかしなくてはならない。

その具体的な解決策を本稿の最後に「一筋
の光」としてどうしても書きたかった。

とはいえ、そんな事が私に分かるわけもな
く、本やネットで資料を探したが腑に落ち
る答がなかなか見つからなかった。
が、一つだけ「これは！」と思う一つの答

を見つけたので、受け売りで恐縮だが、
以下それを紹介して本稿を終えたい。

「優生思想をどうやって撲滅するか」

まず「何故、優生思想が横行するのか？」
を考える。
結論から書けば「それなりに論理がある
(それなりに筋が通ってる)から」だ。だから
「そーいえばそうだよなーっ!」と賛同す
る者が後を絶たないのだ。そういう輩は
自分勝手ながらも、それなりの論理・理屈で
社会正義の名のもとに『人の命は等しく
尊い』ということを完全に否定している。
なので彼らに「全ての人の命は等しく尊
いのだ!」と例え百万回説いたとしても
「馬の耳に念仏」であり納得しないだろう。

では、どうしたらいいのだろうか?—その
論理とやらの合理性を突き詰めて検証し
てみせるしかない。つまり「優生思想を認め
てしまうとどういう結末になるか」を突き詰
めて具体的に示すのだ。(考えるのも恐ろ
しいことだが)仮に優生思想を認めて
障害者を排除したとする。確かに
障害者にかかっていた社会的コストは減
るだろう。でも、恐らくそれだけでは終わら
ない。その次は恐らく「障害者と同じく役
に立たず社会的コストのかかる老人も
排除すればいい」という話になるだろう。
そのまた次は治る見込みのない(とされる)
病人、「有害」とレッテルを貼られた在日

外国人、何らかの理由で働かない・働け
ない(自活できない)者、社会(国)に反逆
を企てた(とされた)者…と、次々と排除
対象が際限なく広がっていく。しかも、
社会の価値観は絶えず変化していくので、
将来的に価値観自体が変わり、更に排除
対象が広がる可能性もある。つまり「優生
思想を認めてしまうと誰もが合法的に
社会に抹殺される危険が生じる」という
ことだ。だからこそ「人の命に価値序列を
付ける優生思想は間違っている」のだ。

それを説いた上で「貴方はそういう社会
を望みますか?」と問いかけることで優生
思想を持つ者を撲滅か、かなりの数減らす
ことはできるだろう…という事で本稿を終
えるつもりだったが、「残念ながらこれだけ
で全ての優生思想を撲滅する事はできな
い」という事に気付いてしまった。それは上
に書いた「出生前診断で胎児に何らかの
異常が見つかった場合」である。この場合「そ
れが優生思想に繋がり、それが社会的にと
んなに危険な思想はであるか」を親に説いた
としても妊娠中絶を思い止まらせる
事は多分できないだろう事に気付いたから
だ。母体保護法では「胎児の障害を理由と
した中絶は許されていない」が、秘密裏に
行われてしまう現実もあるそうだ。厚労
省の怠慢か見て見ぬふりをしているとし
か思えない。厚労省は産婦人科学会など
に対して促して強く指導すべきだろう。

では、胎児の障害を理由とした中絶を
どうすれば防げるのだろうか？これも俄
仕込みの浅知恵で恐縮だが考えられる
手立てを下記に列挙してみる。

・妊娠告知の際、障害児が一定の割合で産
まれる可能性がある事。障害児が生まれた
場合の育児に関する情報を十分に与え
親の理解を深める

・障害者やその親・家族に対して偏見を持
たない社会を作る

・障害児の子育て支援を経済・医療・相談
など総合的に強化する

…などが考えられる。特に最後の「障害児
の子育て支援を強化すること」は障害児・
健全児を問わず少子化対策の一環として
早急に実施されるべき施策であろう。

【最後に】(蛇足)

「優生思想」が一日でも早く、日本社会
から撲滅されることを願うばかりだが…
近年の日本の状況を見てみると、特に
第二次安倍内閣になって以降は「戦後レジ
ームからの脱却」と称して、あろうことか
政府が先導して戦後の民主主義を否定し、
平和・人権を柱とする日本国憲法を否定
(改憲)論が声高に叫ばれ、秘密保護法の
制定、自衛隊の海外派兵などなど明らかに
戦前回帰の方向であり、このまま行けば
戦時体制にすら戻りかねない状況に
見受けられる。

更に直近のニュースでは「教育勅語

(「国民一丸となって天皇のために戦う
こと」を旨とする教育文書)を学校授業
の教材として許可する」と政府が決めたそ
うだ。このまま進めば「優生思想(を基本と
する優生保護法)」も政府が率先して復活
させかねないと思う。しかも軍事優先国家
になれば、国家予算は福祉などの社会保障費
よりも軍事関連費の方が優先される。今で
も社会保障費の話には必ず「その財源
は？」と問われるが、軍事関連費の話の場合
は一切その財源を問われない…というのは
私の錯覚だろうか？増してや「万一戦争
になれば予算どころか障害者・老人・子供
など社会的弱者は命すら危うくなる」と
いう事を肝に銘じなくてはいけない。「戦時
体制下では障害者はどんな形にせよ、よ
り深刻な影響を受け、最悪の場合には
抹殺される事もある」というのが古今東西
を問わず自明の理であるからだ。「一人でも
多くの障害者が一刻も早くそれに気付き
危機感を持って軍国主義国家への方向性を
変えるべく声を上げるべきだ！」と強く思
う。声を上げられるのも今のうちだけかもし
れないのだから。

参考文献

- ・現代思想「相模原障害者殺傷事件」
- ・「個人の尊重」を定着させるために

木村草太著

・冊子「人工妊娠中絶を減らすために」

一國、社会、個人ができること—

角田亜希著

さがみはら「津久井やまゆり園」での しょうがいしゃぎゃくさつじけん 障害者虐殺事件について

しげともこ
繁朋子

ねん がつ にち さがみはら つく い
2016年7月26日、相模原の「津久井やまゆ
り園」で元職員えん もとしよくいん だんせいの男性による入所にゆうしょ
しょうがいしゃ たい ぎゃくさつじけん ひ お
障害者に対する虐殺事件が引き起こさ
れたことを知ったとき、まず思ったのは、そ
れまで懸念していたことが予想を上回る
さいあく はんこう お
最悪の犯行として起こされてしまったとい
うことだった。その懸念けねんしていたこととは、
それまで様々な地域さまざま ちいき きょうと ふく おも（京都も含む）で主に
ざいにちがいこくじん かたがた たい まった りふじん
在日外国人の方々に対する全 くりんじん
なヘイトスピーチが横行していたことから、
そのようなマイノリティに対する攻撃は決
たにんごと え かなら しょうがいしゃ
して他人事ではあり得なく、必ず障害者
たい なん かたち あくえいきょう
に対しても何らかの形で悪影響がある
けいかい やさき できごと
だろうと警戒していた矢先の出来事だった
ほうどう かぎ ないよう
からである。報道された限られた内容から
むさべつ
でもはっきりわかったことは、これは無差別
さつじん しょうがいしゃ
殺人ではなく、「障害者はいなくなればい
かんが も じんぶつ
い」という考えを持った人物による
しょうがいしゃ む はんこう
障害者に向けた犯行であったこと。
しょうがいしゃ たい
障害者に対してはヘイトスピーチどころ
ざんぎやく
か、いきなりこんなにも残酷なヘイトクラ
かたち こうげき お
イムという形での攻撃が起こされてしま
いやおう おも し
うんだと否応なく思い知らされることとな
ってしまった。

じけん ほうどう ひ まいにちほうそう
この事件の報道があった日、毎日放送の
ごご ぼうじょうほうばんぐみ つた
午後からの某情報番組ではどう伝えるか
み しゅつえんしゃ なんにん
観ていたところ、出演者の何人もがどう

コメントして良い
ことばすく
ものやら言葉少な
しゅんじゅん
に 逡巡している
ぼうけーだい
ところに、某 K 大
けいざいがくきょうじゅ
の経済学教授が
じぶん みうち
自分の身内にも
ひがいしゃ おな
被害者と同じよう
しょうがいしゃ
な障害者がある
とろ うえ
ことを吐露した上



かぞく はら た
で、こともあろうに「家族であっても腹が立
しせつ
つようなことがある。だからこういう施設の
しょういん ひと おだ せいかく
職員になるような人はよほど穏やかな性格
やさ ひと つと の
の優しい人でないと務まらない。」と述べた。
ひやっぱゆず みうち しょうがいしゃ
百歩譲って、身内に障害者しょうがいしゃがこの
きょうじゅ じけん みぢか ろうばい
教授にはこの事件は身近すぎて狼狽のあ
てきせつ い
まり適切なことが言えなかったのかもしれ
じょうじょうしゃくりょう かんが
ないと情状酌量して考えてみたとして
じけん ちよくご はつげん ひど
も、この事件の直後の発言として酷すぎる
おも ひど ししょうひがい お めい さら
と思った。酷い死傷被害を負った46名に更
お う
に追い打ちをかけているようなものだ。そし
はらだ たい
てもっと腹立たしかったのは、それに対して
ほか しゅつえんしゃ き どく
他の出演者たちはただ気の毒どくそうな
ひょうじょう ころ めい
表情めいをしているだけで、殺された19名の
しょうがいしゃ いのち たいせつ だれひとり
障害者の命の大切さについて誰一人と
ことば い お
してフォローの言葉を入れる押さえがなか
なに い
ったことだ。このまま何も言わなかったらま
しょうがいしゃ いのち かる き
すます障害者の命が軽んじられる気が
わたし とっさ ばんぐみあて ぼうきょうじゅ
して、私は咄嗟にこの番組宛に「某教授
はつげん ひど てん
の発言が酷かった点と、ヘイトスピーチが
おうこう さつこん とく じけんほうどう かんれん
横行する昨今、特にこの事件報道に関連
しょうがいしゃ じんけんけいし じょうちよう
して障害者の人権軽視が助長されるこ

とがないように注意を払ってもらいたい」
旨をメール送信した。Facebookにこの件を
投稿したとき、友人から「『障害者の
人権』って何？」というツッコミのメン
トを入れられてしまった。普通に考えれば
ことさら「障害者の」と付けなくても
「人権」でいいのだが、この事件でみられた
ようにあまりにも「人として障害者が
尊重されていない」場面に多く出くわすと、
あえてことさら「障害者の人権」と言わ
なければという気持ちになってしまう。

そして起こされた犯行内容もさることな
がら、多くの方々がもう既に指摘されてい
るように、虐殺された19名の被害者の
方々が施設入所の障害者であったこと
から、「遺族の希望で」という理由で名前や人
となりの公表がされないという異例の
報道のされ方（註1）、事件からまだ半年も
過ぎていなかった12月26日という早すぎる
時期に施設側により施設前の献花台が撤去
されたことや施設建物の建替えの決定など
から見えてくる状況に、被害障害者の
命への尊厳はどこにあるのだろうか、よ
り悲しみと憤りが深くなってしまった。

この事件の容疑者は極めて身勝手な
貧弱な障害者観で「障害者は不幸をつ
くることしかできない」という決め付けによ
って障害者虐殺を実行した。この容疑者
に限らず胎児に障害があるとわかったら
中絶を選ぶ人も少なくないと聞く。人が

勝手な価値観で命の優劣を決めることな
ど絶対に許されてはいけないと思うのだが、
優生思想を基にした考えから日本
産婦人科学会が承認して着床前診断
や出生前診断を推し進めている現実も
ある。ただそのような現実は、できること
なら障害者とは関わりなく生活できるこ
とが「幸せ」と偏狭にしか捉えられない
人々の価値観で成り立っているだけではな
いか。

もう一方ではそんな世間を尻目に感じな
がら多くの障害者の先輩たちは、（私
が改めていうまでもないが）何も介護制度
などない70年代から自力で介護者をかき集
め、「個性豊かで幸せな」自立生活を成り立
たせてきたという実績があり、それが基で
今多くの人々が利用している介護制度のでき
る経緯に繋がったという現実もある。また
街に出れば多くの駅や建物にエレベーター
が設置されているが、それも社会のバリアフ
リーの意識が自然に高まってできたもので
はなく、障害者の先輩たちの長年に渡
る交渉の苦勞の賜物であるということをし
忘れてはならない。

そして私の元の職場であった劇団態
変では自身も重度障害者である芸術
監督・金満里の演出のもと、寝たきりなど
重度障害のパフォーマーがレオタード
姿の身体だけでそれぞれに豊かな芸術
表現を展開する、世界でも唯一無二の
舞台を創り出している。その舞台を観ると

にちじょうせいかつ　くるま　つえ　りよう
日常生活で車イスや杖を利用している
しょうがいしゃぞう　まった　ちが　じゆう　しんたい
障害者像とは全く違った自由な身体で
く　ひろ　ひょうげん
繰り広げられる表現に、「できる・できな
い」で評価されるような狭い枠を超越し、
じゅうらい　まった　ちが　しょうがいしゃかん　しんたい
従来とは全く違った障害者観・身体
かん　かん　め　うろこ　お　かんかく
観を感じ、目から鱗が落ちる感覚になる
のである。

か　れ　ふこう
このように彼らは「不幸をつくることしか
できない」どころか、何も無いところから
ぶんか　つく　あ　かいたくしゃ
文化を作り上げてきた開拓者たちであり、
ざんしん　ていげん
どこにもない斬新な提言のできるクリエイ
ターなのである。

れい　と　かたよ
このいくつかの例を取ってみても、偏っ
か　かん　こしつ　はいじよ
た価値観に固執して排除するのではなく、
さまざま　じょうたい　か　かん　ひとびと　たが
様々な状態や価値観の人々が互いに
こうかん　あ
交感し合うことで、これまでになかったよう
あら　はっけん　ゆた　ぶんか　そだ
な新たな発見があったり、豊かな文化が育
かのうせい　み　しょうめい
つ可能性に満ちていることの証明ではな
いか。

ひ　び　せいかつ　なか　しょうがいしゃ　いのち　あ
日々の生活の中で障害者の命が当た
まえ　そんちよう　しゃかい
り前に尊重される社会にできるよう、ど
ひょうげんほうほう　と　く
んな表現方法の取り組みでもいいので、
じぶん　ちい　ひと　ひと
自分のできる小さなことからでも一つ一つ
と　く　な　かたがた　いのち
取り組んでいって、亡くなった方々の命に
すこ　むく　おも
ほんの少しでも酬いたいという思いもある。
たと　いままな　と　く
それは例えば、今学びながら取り組もうと
しょうがいしゃ　ぼうさい　かんが
している「障害者の防災を考える」こと
きょうつう　かだい　おも
とも共通の課題はあると思っている。
じぶん　にゅういん　たいけん　い　しせつ
自分の入院体験で言えば施設とは、
めんかい　じゆう　がいしゆつ
面会も自由ではなく、外出もほとんどでき
ないでいつ退院できるかもわからないし、

がいかい　おも　た　き　す
外界への思いを断ち切らないと過ごせない
げんかん　い　ところ　じぶん
ので玄関は行ってはいけない所と自分に
おも　こ　おく　ひ　び
思い込ませて送っていた日々があった。さす
いま　すこ　がいしゆつ　きかい
がに今ではもう少しは外出できる機会や
がいかい　こうりゆう　ふ
外界との交流は増えてはいるだろうが、
しない　しせつ　がいかい　かくぜつ
市内の施設でもそれほど外界と隔絶されて
ところ　やまおく　しせつ　なおさら
いる所だったので、山奥の施設なら尚更
そうぞう
と想像できる。

じけん　きいん　せいしん
また、この事件を起因として精神
しょうがいしゃ　だんあつ　つよ　せいしん　ほけん
障害者への弾圧が強まり、精神保健
ふくしほう　かいあく　つよ
福祉法が改悪されようとしていることに強
いか　おぼ　じけん　えいきょう　ちぢ
く怒りを覚える。この事件の影響で縮こ
こんど　すべ　しょうがいしゃ
まるのではなく、今度こそ全ての障害者が
かぎ　くうかん
限られた空間ではなく、それぞれが
じゅうぶん　そんちよう　さまざま　ひとびと　とも　たが
十分に尊重され、様々な人々と共に互
か　か　も　ちいき　いちいん
いに関わりを持ちながら、地域の一員とし
ゆた　か　かん　なか　い　しゃかい
て豊かな価値観の中で生きてゆける社会に
していきたいものだ。

ちゅう
註 1 = インターネットで「19のいのち」
けんさく　な　めい
と検索すると、亡くなった19名の
かたがた　ひと　だんぺん
方々の人となりのわずかな断片
にふれることのできるサイトが
かいせつ
開設されている。
<http://www.nhk.or.jp/d-navi/19inochi/>

朝日訴訟について



こんにちは

あずまじゅんのすけ

東純之介です。

ぜんかい

前回のペンギンニ

ュースでは

しょうがいしゃ きょういく

障害者の教育

う けんり

を受ける権利につ

いて書かさしても

らいましたが、

こんかい ぼく せいかつ

今回は僕が生活

ほ ご じゅきゅうしゃ

保護受給者であ

ることから生活保護の裁判で有名である

あさひそしょう かんたん しょうかい

朝日訴訟について簡単に紹介させていた

だきたいと思います。

それではこの朝日訴訟とは何かと言いま

す。と結核患者であった朝日さんという方

は病気のために生活保護を受けて

療養所で生活していたのですが、実兄か

ら仕送りが受けられるようになったので、そ

の分の生活保護費を打ち切りにされ、それ

に対して朝日さんは国に不服を申し立て、

一審では朝日さんの勝訴で、これに対し国

が控訴し、第二審では朝日さん敗訴して、

第三審の途中で朝日さんが死亡したため

に訴訟は終了しました。この朝日訴訟お

かげで社会福祉や生活保護や生存権とい

ったものの存在意義を国に認めさせること

ができたのではないのでしょうか？現在も

生活保護切り下げが問題となっている中

で朝日訴訟から学ぶべきことはたくさんあ

ります。

【資料】

この訴訟の最中に上告人が死亡したの
で相続人が訴訟を承継したものの、保護
受給権が一身専属の権利である以上
相続の対象とはならないと述べ裁判を
終了させたが、なお念のためとして生活
扶助基準の適否に関する意見を述べている。

それによると憲法25条1項すべての国民
が健康で文化的な最低限度の生活を営

み得るように国政を運営すべきことを国

の責務として宣言したにとどまり、直接

個々の国民に対して具体的権利を賦与した

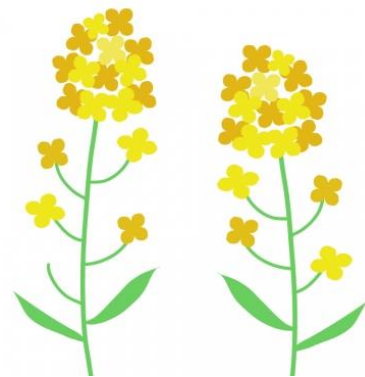
ものではないとし、国民の権利は法律

（生活保護法）によって守られればよいと

した。何が健康で文化的な最低限度の生活

であるのかの認定判断は、厚生大臣の

合目的な裁量に委ねられているとした。



きょねん ねんめ ことし き
去年で20年目でした…。(今年になって気が
づきました) その二

『筋主汗(キンジス・ハーン) 暗中模索の末に 己が障害と向き合 う肚を据えること』

ユグチマコト

ぜんごう はなし さいご しる
前号のお話の最後にこう記しました。

「それまでの生きてきかたや価値観など、ほと
んどを覆えされた“あの人物♀”に、“ガ
ツンとかまされる”お話は、もはや次の『ペ
ンギンニュース33』で。」※

さっそく書いていくところですが、“あの
人物♀”に出会う直前のユグチの状態を
もう少し丁寧に書いておきます。

軽度障害ながら何とか二足歩行で生活
していたユグチでしたが、高校生活終盤
の辺りから19～20歳にかけて筋ジスの
障害が、ゆるやかながら進行しはじめまし
た。

なんでもない舗道を歩いていて、突然、太
腿の前面ならびに内側の筋肉や、脚の
裏・いわゆる 臍あたりの力が抜けて足
がガクンとなり、おもにヒザをつくような
形で転倒、さらに下手な転び方で仰向けに
倒れた際には、軽く頭を打ってしまうよう
なことが度々起こるようになりました。

当時、自分を障害者だと強く認識・理解
したのちに、然るべき行動をとれるはずも
なく、自分を全く受け入れていなかったあ

まりに、手助けをしてくれようとしてくれた
部活のメンバーから距離を置かれてしまっ
たり、気になる異性に対して下手に取り繕
おうとして、なおさらしっくりいかない関係
に望まずして陥ってしまっは自己嫌悪
の連続…という日々が続く、軽度障害の
あるユグチのありのままの付き合いしてくれ
る友人も少なからず居てくれた中、その
友人たちとの交流もほどほどになっていま
しました。

やっていたことといえば、家でも大学の
図書館でも、専門の勉強をほっぽらかして、
ドストエフスキーやら国木田独歩やらを繰
り返し読み耽っていたことぐらいでした。
大学を終える頃ぐらいになっても、本当
にやりたいことが見つからず、それでもブラ
ブラしている訳にもいかず、軽度の障害な
がらレストランなどでアルバイトをしたり
などしていたのですが、そのうちさらに
障害が進行して、そうした食いつなぎもで
きなくなっていきました。

レストランで働いた時に感じたことが
いまだに瑞々しく残っていますので、少し
脱線します。

バイトや就職を探しても、見た目は
障害者には殆ど見えなかったユグチが
面接とか電話などで、障害のことを伝え
ると、すぐに断られていた中で、レストラ
ンで働くようになったのですが、そこでは
ユグチが何をできて何をできないかを
厨房の人たちが推し量ってくれながら、

しごと
仕事をさせてもらっていました。

やはり^{しじゅう} 始^{あた}終^ま、頭^{から}と身体^{からだ}を使^{つか}っていなければなら^{しよくば}ない職^{そうとう}場^{つか}のために、相当^{たいお}疲^{しかた}れたりしたこともあ^たったのですが、そうして立^たち仕^し事^{ごと}で働^{はたら}く現^{げん}場^ばの方^{かた}のユグチへの対^{たい}応^{おう}の仕^{しか}方^たに、とてもいたわりがこもっている感^{かん}じがありました。

なぜこんなことを書^かくかという^{こと}と、バ^{しよく}イ^くトを断^かられた職^{しよく}種^{しゆ}を詳^{くわ}しくは書^かきませんが、ユグチが障^{しょう}害^{がい}のことを話^はした途^と端^{たん}に断^{ことわ}つた会^{かい}社^{しゃ}は、どちらかという^{はんばい}とデ^{しん}スクワ^{たい}ークな^{にんげん}り販^あ売^た業^{ふく}なり、身^{しよく}体^{しゆ}というより人^お間^お関^{おも}係^{おも}が優^{ゆう}先^{せん}される職^{しよく}種^{しゆ}が多^おか^{おも}ったように思^{おも}うからです。

“口^{くちう}動^{どう}かすより、身^{からだ}体^{たい}動^{どう}かせ！” 的^{てき}な^な職^{しよく}場^ばの方^{かた}たち^{じじょう}の、ユグチ^{にんげん}のよ^あうな事^{ふく}情^{ふく}のあ^{しよく}る人^{にんげん}間^あへ^たの暖^{ふく}かさ^{ふく}を含^{ふく}んだ対^{たい}応^{おう}に接^{しよく}する^{じじょう}こ^{ふく}がで^{しよく}きたこ^{しよく}とは、就^{しよく} 労^{しよく} さ^{しよく}え^{しよく}もま^{しよく}ま^{しよく}なら^{しよく}ない今^{いま}の状^{じょう} 態^{たい} から思^{おも}え^{おも}ば、大^{たい} 変^{へん} に貴^き 重^{ちゆう} な^{ちゆう} も^{ちゆう} ので、感^{かん} 謝^{しゃ} の念^{ねん} に堪^た え^た ませ^た せん。

ほんすじ
本筋にもどります。

働^{はたら}き口^{ぐち}が無^なかったとい^{じりつ}って^{じりつ}も、ま^{じりつ}だ^{じりつ}自^{じりつ}立^{じりつ}なん^{じりつ}か^{じりつ}し^{じりつ}て^{じりつ}な^{じりつ}か^{じりつ}つ^{じりつ}た^{じりつ}ので、家^{いえ}に置^おいてもら^おっている状^{じょう} 態^{たい} ではありません^{じりつ}。

とき^{てん}に転^き倒^きに気^きをつ^{がい}け^{しゆ}ながら外^{がい} 出^{しゆ}など^{しゆ}は^{しゆ}でき^{しゆ}て^{しゆ}いた^{しゆ}の^{しゆ}で^{しゆ}す^{しゆ}が、家^{いえ}以^い外^{がい}に行^いくところ^いが^いなく、親^{おや}が居^いなくな^{とき}った時^{とき}にはどうする^{ふあん}んだ、とい^ふった不^ふ安^{あん}め^ふいた^ふものも^ふも^ふた^ふげ^ふて^ふきて、^ふその^ふうち、^ふ「オ^{なん}レ^{なん}の^{なん}こ^{なん}の^{なん}何^{なん}という^{なん}か、^{なん}“世^せ間^{けん}せ^{けん}ま^{けん}さ^{けん}め^{けん}いた^{けん}もの”^{けん}の^{けん}正^{せい} 体^{たい}という^{せい}か^{せい}原^{げん} 因^{いん}は、

い^{いま}った^{いま}い^{いま}ど^{いま}こ^{いま}に^{いま}あ^{いま}る^{いま}ね^{いま}ん！？^{いま} 今^{いま}は^{いま}エ^{いま}エ^{いま}と^{いま}して^{いま}も、^{いま}こ^{いま}の^{いま}先^{さき}、^{いま}3^{だい}0^{だい}代^{だい}・^{いま}4^{だい}0^{だい}代^{だい}にな^{いま}って^{いま}し^{いま}も^{いま}た^{いま}と^{いま}き^{いま}に^{いま}ど^{いま}う^{いま}なん^{いま}ね^{いま}ん？^{いま}”^{いま}とい^{いま}う^{いま}ユ^{いま}グ^{いま}チ^{いま}にと^{いま}つ^{いま}て、^{いま}本^{ほん}質^{しつ}的^{てき}な^な悩^なみ^はが^はじ^はま^はった^はので^はし^はた^は。

その^じ時^き期^きと^{だい}して、^{だい}大^{だい}学^{がく}を^そ卒^そ 業^{ぎよう}して^{ねん}から^{ねん}1^{ねん}半^{はん}ほ^{ねん}ど^{ねん}で^{ねん}し^{ねん}ょう^{ねん}か、^な悩^なみ^なに^な悩^なみ^な続^{つづ}けた^{すえ}末^{すえ}に^いや^いつ^いと^いとい^{かん}ます^{かん}か、^{おも}あ^{おも}る^{いた}考^{かん} え^{いた}に^{いた}思^{おも}い^{いた}至^{いた}りました。「^{しょう}そ^{しょう}う^{しょう}い^{しょう}え^{しょう}ば^{しょう}オ^{しょう}レ^{しょう}は、^{しょう}障^{しょう} 害^{がい} 者^{しや}だ^{しや}とい^{しや}う^{しや}こ^{しや}に^{しや}な^{しや}って^{しや}い^{しや}る^{しや}は^{しや}ず^{しや}な^{しや}の^{しや}に、^{しや}ま^{しや}た^{しや}そ^{しや}れ^{しや}故^こに^こ行^{こう}動^{どう}を^せ狭^せめ^せら^せれ^せて^せい^せる^せ現^{げん}実^{じつ}が^{げん}あ^{げん}る^{げん}とい^いう^いの^いに、^いず^いつ^いと^い自^じ分^{ぶん}の^{しよく}障^{しょう} 害^{がい}と^む向^あき^あ合^あう^あこ^あと^あを^あ避^さけ^さて^さき^さて^さる^さん^さと^さ違^{ちが}う^{ちが}の^{ちが}か^{ちが}」。

テ^みレ^{ぼう}ビ^{じかん}を^{じかん}見^みて^みて^みも、^{とう}某^{とう} “^{とう}2^{とう}×^{とう}時^じ間^{かん}テ^{じかん}レ^{じかん}ビ^{じかん}”^{じかん}な^{じかん}ど^{じかん}で^{じかん}は、^{じかん}そ^{じかん}れ^{じかん}こ^{じかん}そ^{じかん}当^{とう}時^じの^{じかん}ユ^{じかん}グ^{じかん}チ^{じかん}な^{じかん}ど^{じかん}よ^{じかん}り^{じかん}ず^{じかん}つ^{じかん}と^{じかん}障^{しょう} 害^{がい}の^ぎ重^{そく}い^{そく}方^{そく}た^{そく}ち^{そく}が^{そく}、^{そく}た^{そく}と^{そく}え^{そく}ば^{そく}義^ぎ 足^{そく}で^{そく}ふ^ふじ^ふ山^{さん}に^ふチ^ふャ^ふレ^ふン^ふジ^ふし^ふた^ふり、^ふ難^{なん} 病^{びよう}を^も持^もち^もな^もが^もら^もも^も離^り島^{とう}へ^{えん}の^{えん}遠^{えん} 泳^{えい}を^{かん}取^{かん}行^{こう}し^{こう}た^{こう}り^{こう}…

そ^{かん}れ^{かん}ら^{かん}を^{かん}考^{かん} え^{かん}た^{かん}と^{かん}き^{かん}に、^{かん}生^う ま^う れ^う て^う 初^は め^は て、^はこ^はう^は切^{せつ}に^{せつ}願^{ねが} い^{ねが} ま^{ねが} した^{ねが}。「^{きん}筋^{きん} ジ^{きん} ス^{きん} 以^い 外^{がい} の^い、^い他^{ほか} の^{ほか} しょう^{しょう}が^{しょう}い^{しょう}し^{しょう}ゃ^{しょう}、^{しょう}そ^{しょう}れ^{しょう}も^{しょう}自^じ分^{ぶん}よ^{じぶん}り^{じぶん}ず^{じぶん}つ^{じぶん}と^{じぶん}重^{じゆう} 度^どで、^{じゆう}パ^{じゆう}ワ^{じゆう}フル^{じゆう}に^{じゆう}活^{かつ} 動^{どう}さ^{かつ}れ^{かつ}て^{かつ}る^{かつ}方^{かた}に^{ちよく}直^{ちよく} 接^{せつ} お^あ会^あい^あし^あて、^あお^あ話^わを^わ伺^う いた^うい^うたい^う」。

そ^{ねん}の^{ねん}さ^{ねん}な^{ねん}か、^{ねん}つ^{ねん}い^{ねん}に^{ねん}ユ^{ねん}グ^{ねん}チ^{ねん}は、^{ねん}1^{ねん}9^{ねん}9^{ねん}6^{ねん}年^{ねん}1^{ねん}1^{ねん}月^{げつ}末^{まつ}、^{ねん}あ^{ねん}る^{ねん}方^{かた}の^{ねん}紹^{しょう} 介^{かい}を^{ねん}通^{とお}して、^{ねん}つ^{ねん}い^{ねん}に^{ねん}“^{ねん}あ^{ねん}の^{ねん}人^{じん} 物^{ぶつ} 早^お”^{ねん}及^{かい}び^{かい}ペン^でギ^あンの^あ会^{かい}と^あ出^で会^あう^あこ^あに^あな^あり^あま^あした^あ。

じごう
次号からついに、

『筋^{きん} 主^{しゅ} 汗^{あせ} (キン^{きん} ジス^{じす}・ハ^{はん}ーン) つ^つい^つに^つペン^{ペン}ギ^ギンの^{かい}会^{かい}と^{かい}出^で会^{かい}い^{かい} “あ^あの^あ人^{じん} 物^{ぶつ} 早^お” に “ガ^ガツ^ツン^ンと^とか^かま^まさ^される” こと』

すいこでん
『水^{すい} 滸^こ 伝^{でん}』^{こう}み^{こう}た^たく^た講^{こう} 談^{だん} 調^{ちょう} ず^ずす)

か はじ
を書き始めることができます。

さいご つ あ
またまた最後までのお付き合い、ありがとうございました。

げんこう さくねん あきはつこう ぜんこう けいさい
※この原稿は昨年秋発行の前号で掲載
よてい みやけ せいきよ ともな
予定でしたが、三宅さんのご逝去に伴い、
ぜんこう みやけ ついとうとくしゅう
前号が三宅さん追悼特集となったため、
こんこう けいさい へんしゅうぶ
今号に掲載されました。(編集部)

さん
その三
『筋置主汗(キンジス・ハーン) ついにペンギンの会と出会い“あの人物♀”に“ガツンとかまされる”こと』

ユグチマコト

あ す おも こころ あだざくら
『明日ありと思ふ心の仇桜
やはん あらし ふ
夜半に嵐の吹かぬものかは』

じょうどしんしゅう かいそ しんらんしょうにん
これは、浄土真宗の開祖・親鸞聖人
ようみょう まつわかまる さい はる
(幼名を松若丸という)が9才の春に
しゅつけ ちよくぜん よ わ か
出家される直前、詠まれた和歌です。『ま
あした み おも さくら よなか
た明日見ようと思っていた桜が、夜中の
とつぜん あらし むざん ち
突然の嵐で無残に散ってしまうように、
あした
明日のことはどうなるのか誰にもわかりま
せん。どうか今すぐ得度の儀式をお願いしま
す。』という松若丸の心情に周りの人々
まつかまる しんじょう まわ ひとびと
は心打たれ、その夜のうちに得度の式が
おこな
行われたそうです。

あ す い み げんだい
この『明日ありと…』という意味は現代で
つう こども しゅくだい
も通じるものがあり、子供のころ宿題など
あとまわ わ か ひ
を後回しにしていると、よくこの和歌を引き

あ だ しか
合いに出されて叱られたものでした。

いま ふ かえ じぶん じんせい
ただ、今から振り返ると、自分の人生で、
わ か い み もっと はんえい
この和歌の意味が最も反映されていたのは、
かい で あ ねんだいなか
ユグチがペンギンの会と出会った90年代半
とうじ し
ば(当時24)だったかも知れません。(この
とうじ あ す わ か じぶん い
当時は『明日ありと…』の和歌と、自分の生
かた むす
き方を結びつけるなどありませんでしたが)

とうじ じっかず
当時、実家住まいだったユグチは、いずれ
ひと く ばくぜん おも
は独り暮らしをしたいと漠然と思っ
じりつしょうがいしゃ たにん かいご
たものの、自立障害者として他人の介護を
つの ちいき じりつせいかつ おく
募りながら、地域で自立生活を送るとい
い かた なに し
生き方など、何も知りませんでした。

すく げんざい じぶん くら おのれ
少なくとも、現在の自分と比べて、『己
じんせい たい きがま そうとうとほ
の人生に対する気構え』が相当乏しい
じょうたい ことば られつ じりつ
状態でした。(“言葉の羅列”→自立
しょうがいしゃ あま おさな ききかん な
障害者としての甘さ・幼さ・危機感の無
じかく な
さ・自覚なし・ビジョン無し…いくらでも出
てくるな)

じょうたい い やさき な
そんなぼんやりの状態で居た矢先、亡き
たかはしきみ こ はじ あ
高橋公子さんに初めてお会いしたのっけか
しか と おぼ
ら叱り飛ばされたのを覚えています。

とし い ま なに
『そんな歳になるまで、あなた今まで何を
してたのよ!?』

しんこうせい しょうがい じぶん あし ある
(進行性の障害ながら、自分の脚で歩いて
む み
いたユグチに向かって)『よく見ると、あな
あし ほそ ある
た脚がすごく細いじゃないの!? 歩けなく
なったらどうするつもりなのよ!?』

ひとり
『一人になったらあなたどうして生きてい
くつもりなのよ!? 親はあなたより先に死ん
でいくのよ!』

いま おも さき か
今から思うと、このやりとりは先に書いた
ことば られつ じょうたい どうじ
た“言葉の羅列”状態の当時のユグチを
つうれつ ひはん き きかん う つ
痛烈に批判し、かつ危機感を植え付けるもの
となりました。

わ か い やはん あらし ふ
あの和歌で言えば、『…夜半に 嵐の吹か
ぬものかは』という部分とかぶるかも知れま
せん。

ご なが じ かん げんざい じりつ
その後、長い時間をかけて、現在の自立
せいかつ む じぶん じんせい うご はじ
生活に向けて自分の人生が動き始めたの
ですが、あの時は公子さんに、『障 害 者で
あろうとなかろうと、自分の人生は一度きり
しかない』ということに気づかせてもらった
んだと思います。

ぞんじ さだ
ご存知だったのかは定かではありません
が、公子さんがもしこの和歌に触れられ、そ
い み し い
の意味を知られたとすると、こう言われるで
しょう。

わたし い はなし か
『私がアナタに言っていた話と、そうは変
わらないじゃないのよ!?』



ゆぐちまこと たかはしきみこ わかやまけんくしもとちょう ねんあき
湯口 真と高橋公子 和歌山県串本町にて (2000年秋)

かい あたら はい
ペンギンの会に新しく入ったメンバ
しょうかい
ーの紹介です。

みな いのうえまさひろ しがつ
●皆さんこんにちは、井上正宏です。四月
みつか ろくじゅう しゅみ あいけん
三日で六十になりました。趣味は愛犬との
さんぽ さんぽ まち ふうけい きせつ
散歩です。散歩をしながら、街の風景や季節
うつ か み きょうみぶか もの
の移り変わり見るのが興味深い物がありま
す。妻のみどり共々よろしく願いいたしま
す



わたし いのうえ い わたし
●私は、井上みどりと言います。私の
ともだち
友達、まやちゃんからペンギンの会のこと
き ちょんみ いろいろ かい
を聞き、清美さんにも色々ペンギンの会
き はい いただ
のことをお聞きして、入らせて頂くことにな
りました。

わたし しゅじん いっしょ
私は、主人と一緒にクウちゃんハウス、
ユウ&ゆき・あきハウスという仕事とボラン
かつどう てつだ
ティア活動をスタッフに手伝ってもらいな
がらしています。

わたしたち こ とう かわい あいけん
 私 達 の子どもは、3 頭の可愛い愛犬で
 す。クウちゃんハウスでは、ネストというド
 ッグ・ホテルとトリミングをやっておられて
 いるお店と提携してワンちゃん達のしつけ
 教室や出張トレーニングをやらせてい
 ただいています。ユウ&ゆき・あきハウスで
 は主に、障害や病気を持ったお子さま達、
 保護犬・保護猫達への募金集めの協力や
 募金をさせていただいたり、私と主人は
 一応、メディカル・アロマという資格とか、
 カラー・セラピーの資格、霊気という資格を
 持っているのです、それらの資格を活かしたサ
 ポートもこれからもっていきたくと思
 っています。一応、私は、少し昔にカウ
 ンセリングの勉強もしていたこともあり、
 メールでのカウンセリングも受けさせてい
 ただくこともボランティア活動の中の一つ
 に入らせていただいています。私の友達
 の中には、プロのアーティストの方達がお
 られたり、リハビリ関係の有名な先生方も
 おられていますので、また何かペンギンの会
 のみなさんお役にになれることがあればいい
 と思っています。
 私の夢は、障害や病気を持った子ども
 達にそれぞれに合ったプログラムを専門の
 スタッフが家族の方と相談をしていきなが
 ら、そのお子さんに合わせたプログラムをつ
 くり、身体と心のリハビリを楽しくできる
 ような場所をつくり、そこでは保護犬・保護
 猫達も一緒にお子さま達と遊べたり、リハ
 ビリも一緒にできたり、保護犬・保護猫達の



あたら かぞく み
 新しい家族を見つけてあげられるような
 場所をつくるのが私の夢です。もちろん、
 スタッフには障害者の方達も加わってい
 ただきたいと思っています。この夢が叶え
 られるかどうかはわかりませんが、夢は
 色々これからも持ち続けていきたくと思
 います。

わたしたち とう こ たち うえ とう
 私 達 の3 頭の子ども達も上の2 頭は、
 保護犬から産まれて、その産まれた兄弟が
 産んだ子どもです。一番下の子は、飼い主さ
 んがお母さん犬を飼えなくなったといっ
 て、私達のところで引き取ってから産
 まれた子を私達が引き取りました。名前は、
 一番上のお兄ちゃん犬がクウです。今年の
 7月で12歳になります。クウの名前は、盲導
 犬クイールからとりました。クイールみたい
 に賢くて、優しい子になって欲しいとい
 う思いからクウとつけました。私達の思
 い通りにクウは優しく、賢く、育ってくれて
 います。少し怖がりさんなので、知らない人

ほか たち ほ
や他のワンちゃん達に吠えてしまうことも
ありますが、とてもいい子です。

した いもうといぬ ゆ き な ことし がつ
その下の 妹 犬、夕生奈は、今年の 12月
さい ゆ き な なまえ つき
で9歳になります。夕生奈の名前は、月のよ
やさ ひかり こ たち あきら こ
うに優しい 光 で子ども達を 照 し、子ども
たち ころ あか み ふ
達の 心 に明るい実を増やしていけるよう
こ ほ ねが ゆ き な つ
な子になって欲しいと願って夕生奈と付け
ました。みんなが呼ぶときには「ゆき」と呼
んでいます。ゆきは、お転婆で、おやつ大好
こ いっしょ こわ
きな子です。ゆきもクウと一緒に怖がりさ
んなので、吠えてしまうことがあります、
こ す あま ぼう
子どもは好きです。あと、甘えん坊なので、
わたし ひざ うえ の とお
すぐに 私 の膝の上に乗ったり、お父ちゃん
だ よ き
に抱っこしてと寄って来たりします。

いちばんすえ こ あきな あきな ことし
さて、一番末っ子、明奈です。明奈は、今年
がつ さい あきな なまえ
の8月で5歳になります。明奈の名前は、
しょうがい びょうき も こ たち ころ あか
障 害 や病氣を持った子ども達の 心 に明
み つ こ
る実を付けてあげられるような子になっ
て欲しいと、明奈と付けました。明奈を呼ぶ
かわい よ
ときには、可愛いので、「あーちゃん」と呼ん
でいます。あーちゃんもお姉ちゃんの真似を
てんば ず たまご かたち
して、お転婆で、おやつ好きで、卵 の 形 の
す こ こわ
ボールが好きな子です。あーちゃんも怖がり
さんなので、吠えてしまうこともあります。
いちどな あま
でも、一度慣れてしまえば、甘えてくるので、
かわい こ おも
可愛い子だと思います。あーちゃんは、ミニ
チュア・ダックスなので、からだ
ので、抱っこしても重たくないです。

わたしたち こたち
私 達は、この子達とドッグ・ダンスやア
きょうぎかい
ジリティーとかをしています。競技会とか

で きかい
にも出ているので、機会があれば、みなさん、
み き
見に来てくださいね。

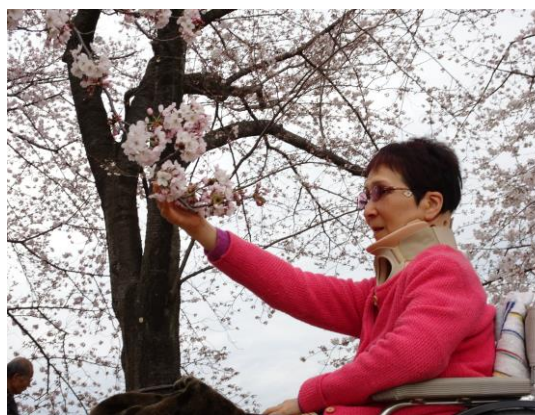
じつ わたしたち とう
実は、私 達には、もう1頭、ユウという
こ ことし よ
子どもがいました。今年まだこの世にいたら、
がつ さい ゆ う ゆうき
9月で10歳になっていました。ユウは、勇気
きぼう しょうがい びょうき も こ たち あた
と希望を 障 害 や病氣を持つ子ども達に与
えられるような子になって欲しいという願
い っ じつ
いでユウと付けました。ユウは、実は、クウ
おい こ う からだ
の甥っ子です。ユウは、生まれつき 体 の
めんえき よわ ひふびょう かか
免疫が弱く、アカラスという皮膚病に罹っ
てしまって、ねん かげつ みじか しょうがい
1年3ヶ月という 短 い 生 涯
お わたしたち たびだ
を終え、私 達 のところから旅立っていきま
した。ユウは、やさ にかか こ
しく、明るい子でした。ト
レーナーの方にもセラピー・ドッグに向いて
い わたしたち
います、と言われていました。私 達 から
たびだ かげつまえ いっしょ きょう
旅立つ2ヶ月前までクウと一緒にしつけ 教
しつ い
室に行って、トレーニングをしていたのです
が、私 達 が他の場所に引っ越ししたことが
からだ ひ
ユウの身体にストレスだったのでしょうか。引
こ からだ よわ
越してからまた身体がだんだん弱って
きて、がつ く たびだ
12月の暮れに旅立っていきました。で
も、ユウには、ほんとう いろ おし
本当に色々なことを教えて
もらって、この子を子どもにして本当に良か
ったな、と思っています。

わたし かぞく
これが 私 の家族ですが、みなさん、これ
なかよ
から仲良くしてください。どうぞ、よろしく
ねが
お願いします。

クウ、ユウ、ゆき、あーちゃんママこと、
いのうえ
井上みどりでした



かい はなみ やわたし せわりづつみ ねん がつ
ペンギンの会お花見 八幡市 背割堤にて（2017年4月）



【ペンギンの会 2016年度の行事・できごと】

がつとおか
★4月10日（日）

はなみ
お花見
ばしよ きょうとふりつしよくぶつえん
場所：京都府立植物園



がつなか
★8月7日（日）

かい のうりようかい
ペンギンの会 納涼会
ばしよ けいはんきょうと
場所：ホテル京阪京都

がつこのか
★10月9日（日）

ひがしにほん だいしんさい くまもと じしん しょうがいしゃ
東日本大震災・熊本地震障害者
きゅうえんがいう ばしよ しじょうかわらまち
救援街頭カンパ 場所：四条河原町
ぼきんがく
※募金額 ￥33,866-



がつみつか
★11月3日（木）

ひがしくじょう しゅってん
東九条マダンに出店
ばしよ もと とうかしやうがっこう
場所：元・陶化小学校



がつ にち
★2月12日（日）

かい しんねんかい
ペンギンの会 新年会
しん みやこ ようめいでん
場所：新・都ホテル 陽明殿

がつ にち
★3月12日（日）

ひがしにほん だいしんさい くまもと じしん しょうがいしゃ
東日本大震災・熊本地震障害者
きゅうえんがいう ばしよ しじょうかわらまち
救援街頭カンパ 場所：四条河原町
ぼきんがく
※募金額 ￥87,674-



【2016年4月～2017年3月までペンギンの会に会費・カンパをいただいた皆様】
(敬称略・順不同)

☆月会費

三宅光男 小山弘 李清美 湯口真 繁朋子 繁周作

計 5万4千円

☆年会費

田島信二 松浦武夫 森岡均 矢野喬介

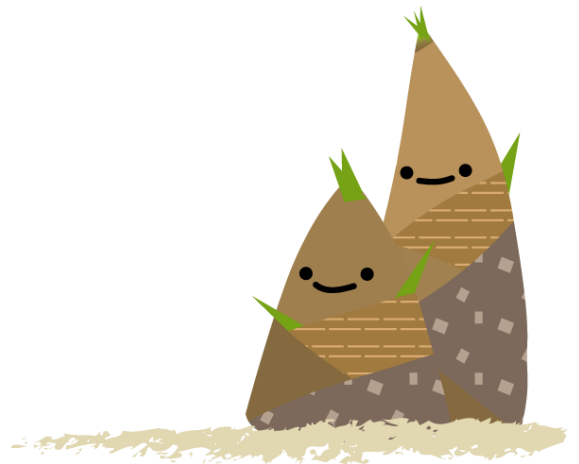
計 2万4千円

☆カンパ

小栗栖直樹 陳太一 矢野恵子 皆川夏樹 広岡一
北角和恵 堀口美智代 馬庭京子 河村史子
正司拓生 東真理子 藤田光恵 岩本豊・京子
狄守記孝 湯口憲子 杉山晶 森本豊 森岡均
浦辻宏昌

計 11万6千円

総合計 19万4千円



以上の、会費・カンパをいただきました皆様、
そしてその他ご支援をいただいた皆様に心より感謝を申し上げます。



じりつしょうがいしゃ かい
自立障害者グループ ペンギンの会

〒612-8411

きょうとしふしみくただくぼちょう ばんち

京都市伏見区竹田久保町62番地

あだち たけだ ごう

足立ハイツ竹田132号

ちかてつからすません ばしえき とほふん
(地下鉄烏丸線 くいな橋駅 徒歩4分)

でんわ とも
電話：075-755-8177 (FAX共)

Eメール：pengin.kai@gmail.com

ホームページ：http://pengin-kai.jpn.org/

かい けんさく
「ペンギンの会」で検索